

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 31 年 4 月 6 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士後期課程学生
氏名	石塚真太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ウガンダ共和国カリンズ森林保護区
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生チンパンジーのオスの遺伝構造
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 31 年 3 月 6 日 ~ 平成 31 年 4 月 6 日 (31 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
霊長類研究所 古市剛史教授、橋本千絵助教
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回のウガンダ共和国カリンズ森林保護区への渡航は、野生チンパンジーの観察および非侵襲的 DNA サンプリングを目的として行った。私がこれまで野生ボノボは 3 度の調査で観察したことがあったが、野生チンパンジーを観察するのは初めてであった。ボノボとチンパンジーの社会の違いは広く知られているが、実際に肌で体感できていたわけではなかったため、楽しみにして調査地入りした。行程は下記の通りであった。</p> <p>2019/3/ 6 成田国際空港発 2019/3/7 エチオピアを経由し、エンテベ着 2019/3/8 カリンズ着 2019/4/3 エンテベ着 2019/4/4 エンテベ空港発 2019/4/5 エチオピアを経由し、成田国際空港着</p> <p>最近の研究から、複数のオスが属する両種の集団の中で、第一位のオスが残す子の割合は、ボノボの方がチンパンジーよりも高いことが分かっている。オス間の繁殖競争は、一見ボノボよりもチンパンジーの方が激しいことを踏まえると、これらの結果は注目値する。その考察として、ボノボでは母親の影響が強く影響すること、集団のメンバーの凝集性がチンパンジーよりもボノボで高いこと、等が挙げられてきたが、今回の調査で私が感じたことは、「チンパンジーのオスはオス間交渉に忙しすぎる」ということだった。あるメスが発情すると、集団内のほとんどのオスが、そのメスと同じパーティで遊動する。しかし、パーティ内にたくさんのオスがいて、オスは自身の権力誇示から機嫌取りまで、様々なことをしないとイケない。順位の高いオスには挨拶をする、若いオスには攻撃して隅に追いやる、同じぐらいの順位のオスには、緊張状態の中で牽制し合う、しばらくすると、少し順位の低いオスにサポーターになってもらうために毛繕いを始める、等々。それぞれのオスが他のオスとの関わりに忙しいと、もはや混沌とした状態になり、結局どのオスの交尾を独占できていないように感じた。一方でボノボは、高順位の母親を持つ高順位オスが集団内のほとんどのメスが集まっているパーティの真ん中に位置取り、その中で発情しているメスとの交尾機会を多く得ているように感じた。また、ボノボの低順位オスは基本的に集団の端っこに居り、パーティの中心にいる発情メスとの交尾機会をなかなか得られないことも、第一位オスが高い繁殖成功を得られる要因の一つかもしれない。</p> <p>また、研究がなされている 2 集団の間のオス間関係の違いも興味深かった。上述したのは集中的に調査がされており、オトナオスが 15 頭いる M 集団を観察して感じたことであったが、オトナオスが 5 頭しかいない S 集団では、第一位オスの立場が比較的安定しており、比較的交尾を独占しているようにも感じた。多くの先行研究で明らかにされてきたことだが、集団内のオスの数は、繁殖システムを規定する強い要因の一つなのだ改めて感じた。また、集団によって異なるオス間関係の違いは、行動学、遺伝学の両面から繁殖システムの種内ヴァリエーションを理解する必要性を示唆しているようにも思えた。</p> <p>今回、野生のチンパンジーの行動レポーターの中で有名な道具使用や、ハンティングを観察できたのも非常に良い経験であった。今回の経験を生かし、これからもボノボとチンパンジーの比較研究を続けていきたい。</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



オスのチンパンジー



赤ん坊のチンパンジー

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラム、ご指導を賜った古市教授、橋本千絵助教、渡航中様々なサポートをしてくださった峠明杜さん、柴田翔平さん、カリンズ森林保護区の皆様に感謝申し上げます。